詩・毒・遍歴

辻井喬随想集

昭和出版

・詩・毒・遍歴
・一九七五年八月十日初版発行

・著者—辻井喬
・発行者—吉富達彦
・発行所—株式会社昭和出版
・住所—東京都千代田区猿楽町一—四—五久松ビル
・郵便番号—一〇一
・電話—〇三—二九五—四九四八（代表）
・振替—東京一五八三九六
・印刷所—凸版印刷株式会社
・製本所—凸版製本株式会社
・定価—一七〇〇円
・©—T. TSUJII 1975 Printed in Japan 0095—751401—3330

詩・毒・遍歴　目次

詩

夕顔別当考 ・9
大人の世界の影の下で ・17
耐えて澄んで ・21
水辺伝説 ・25
私の京都 ・29
黄色い葉の精霊 ・33
真空地帯はヴェトナムから ・37
気象通報 ・42
心のなかの古い街 ・49
私の愛する人生詩 ・59
室生犀星の思い出 ・65
菜の花幻想 ・71

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私の武蔵野 ・73
旅情の記憶 ・75
幻の鳥 ・77
私の詩の遍歴 ・79

毒

在ることの証しとして ・99
永遠の昨日を失って ・106
三島由紀夫氏のこと ・118
浪漫派と私 ・127
「異邦人」異文 ・131
京をまもれ ・136

海鼠と自由 ・139
コクトー雑記 ・143
自由の歌 ・148
暗示に富む明治裏面史——小島直記『福沢山脈』 ・152
憂鬱な日々 ・156
求道者の言葉 ・159
宿命の愛の殉教者〝智恵子〟 ・161
蜻蛉 ・166
ドイツの電子音楽 ・170
思想的混迷と大学問題 ・173

遍歴

オーストラリアで考えたこと ・189
ベルリンの思い出 ・217
パリのボヘミアン ・222
英国は老いず ・225
アメリカの友へ ・229
デリーの印象 ・233
不幸なこどもたち ・237
中国紀行 ・239
＊
あとがき ・268

ブックデザイン・石岡瑛子　題簽・篠田桃紅　ポートレート撮影・沢渡朔

詩

夕顔別当考
大人の世界の影の下で
耐えて澄んで
水辺伝説
私の京都
黄色い葉の精霊
真空地帯はヴェトナムから
気象通報
心のなかの古い街
私の愛する人生詩
室生犀星の思い出
菜の花幻想
私の武蔵野
旅情の記憶
幻の鳥
私の詩の遍歴

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

夕顔別当考

五月の末から六月にかけて、夕方になると庭の植込みの下に咲いている紫陽花のあいだを、雀蛾が、かすかだけれども強い飛翔力を想わせる翅音を立てて飛びはじめる。

郊外の家から麻布に移り住んだ当座は、旧市内と言っても、まだそこここに自然の趣きが残っていたが、近頃はそれも年毎に消えて、虫などの姿は珍しかった。

ただ昼と夜とが交替をする僅かな時間、残光が空に漂っている薄暗い空間を、忙しく蜜を集めてまわる雀蛾は、よほど生命力が強いのか、今でも私の庭に、どこからともなく当然の生存権を主張するように姿を見せた。

蝶と違って、いっさい派手な色彩を身に纏わず、灰色とも薄い蝦茶ともつかぬ体の色を素早く木蔭の花から花へ移動させるので、雀蛾は気の迷いのせいで、得体のしれぬものの影が動いているような錯覚を私に起させるのだ。

この蛾は別名を紅殻天蛾とも呼び、夕顔別当とも言うのだが、こうした名前は破れ築地に絡まって咲く夕顔が、点々と明るさを燈しているような露地を、単衣袴をはいて恋文を配って歩く、数奇心に憑かれた男を想起させることで、私を中世の黄昏にいる気分に陥れる。

この優雅な名前は、中学生用の理科教材の標本になって、虫ピンでガラス箱のなかに貼られている鱗翅

目雀蛾科の昆虫、学名ヘルセコンヴォルヴアリの、後退翼をもったジェット機のような体形、退化して卑猥にさえ見える第二翅、そして異常に長い、貪欲を現わす口吻のために、精悍な鼠に似ていることによって、屢々私に知人の経営者を連想させる雀蛾の印象とは著しく異質であった。
夕顔別当という名称のなかに浮んで来る男は、現実世界の敗者でなければならず、私や私の知人達の住んでいる世界は、夕顔の咲く露地から離れた地域、いつも角逐の鉾の音のする都である。

私は書斎に頬杖をついて、もっぱら雀蛾の古名が喚起する世界に入り込もうとしている自分の心の動きを冷やかに見詰めていた。
私の心には
——家の損亡せるのみにあらず、これを取り繕ふ間に、身をそこなひ、かたはづける人、数も知らず。
この風、未(ひつじ)の方に移りゆきて、多くの人の歎きをなせり。
また、治承四年卯月のころ、中御門京極のほどより、大きなる辻風おこりて、六条わたりまで吹ける事侍りき——
という方丈記の記述が浮んでいた。
荒廃した京の街を吹きぬけるつむじ風を描きながら、鴨長明が見ていたものは何であったのか。
その頃、人々は風景のなかに精神の頽廃を感じ、狂気を見出し、終末を予感していたと思う。
一つの時代が終ろうとしている時、雨風の動きや四季の移り変りに、風景は死相をあらわにして人々に迫るのである。そうして今、私達が生きているのは、もう一つの時代の終りではないのか。

昭和二年に生れた私は、いくつもの戦乱を見てきた。幼年時代の一つ一つの区切りは、支那事変、第二次大戦、敗戦、中国革命といった外部の事変によって記憶の鋲にとめられている。
保田与重郎氏にならって言えば、私にとって、風景は時代、であった。
かつて私は

動乱の時代に残してきた
黄昏の風景のなかでは
飛行機雲の先端が夕映えに染って
石井戸は
汲む人もないままに涸れていった

と書いたけれども、今はこの作品に不満を覚えている。
時間の経過のなかで記憶が美しくなるというのは、私が地獄を見ることのない幼時を送っていたことを意味し、今このような詩句を印すのは、当時の生活へ遅ればせの承認を与えることになると思うのだ。
さらに言えば、往時を美しいものとして想起する姿勢は、〝輝ける昨日〟への信仰告白の様相を帯びてしまうことによって、現代からの遁走を容認し、ふたたび負の視座において、今に加担することになるのである。

これは幾度も失敗をし、その都度虚しさを味う結果になった観念の詐術に過ぎないのではないか。動乱と頽廃の根底を見据えることなしに、美しい世界を造ろうとしてはならないのだ。合戦の響きに満ちている都に住むものにとって、余技の美というものは本来原理的な敗北なのだから。

出家遁世を計ることによって、美的観念の世界を取り戻す方法も、かつては可能であった。しかしその当時でも、現世に住んで離脱に憧れるのは、頽廃の戯画でしかなかったはずである。

たしかに、私が幼かった頃、人々は思い出のなかを影のように往来して、密かに己れを守っていた。批判せず、現実を見ず、そうかといって為政者の声も聞かないという、悲しい猿の習性を身につけて、人々は焼跡に立って優しく首を振り、それでも夕べが訪れると、僅かに残った林のなかで蜩（ひぐらし）が鳴くことに感動していたのだ。

しかし今は、声高に危機を説き、受け容れられないおのれの存在を主張することによって、加担の罪を脱れたと思い込み、偽の解放区に立籠るという智恵が氾濫している。

これは、身を用なき者、に思いなして生きる姿勢からはほど遠い。むしろ用ありげに振舞うことで、自分をも安心させたい素振りが見え透く、演技過剰の世界である。

現代の賢者の行いは、鬱勃たる野心を抱きながら世に容れられなかった人々、つまり伊勢物語の作者の縁者達と頽廃の美を知ってしまった業平との距離よりも、さらに遠い地点に位置している。衰えつつある時代精神のなかで、文化は頽廃の美からもいよいよ遠ざかりつつあると言うべきであろう。

明治以後の文学作品の多くは、疎外されながらも、決して我が身を用なしと思えなかった人々によって

作られてきたのであった。富国強兵という国民的合意が成立していた時代に、これはある意味で止むを得ぬことであった。北村透谷、二葉亭四迷は勿論のこと、永井荷風のような作家にしても、あまり現世に近く立っていて、孤独ではあったが孤高ではなかった、と言われる本質を持っていた。官製の修身斉家と、日本古来の醇風美俗、万邦に比類なき天皇制に拮抗することによって成立し得た文人気質であって、それらを離れた草庵に実在する美意識ではなかった。荷風の文学は精緻な技巧と彼の個人的気質によって錬りあげられた〝風流まがい〟の魅力に満ちていると私は思う。

後進国日本が、文明開化するためには、田舎精神まるだしの藩閥官僚政府がもっとも適合していたのである。彼等こそは、なんの気迷いも悪びれも持たずに、最も貪欲に近代国家の建設に邁進できたのだ。だから彼等藩閥政府にとって文士達は用なき者だったのであって、当時の文人が人間の在り方としての無用者だったのではないのだ。彼等は、日本文学の伝統の一つである頽廃の美学とは縁がなかったのだと思われる。

第二次大戦後の二十数年間は、維新後の八十年の縮刷版であったような気がしてならない。タイトルこそ、富国強兵から経済復興、世界に冠たる日本民族から、平和で民主的な国際社会の一員へと塗り変えられていたけれども、普遍的価値も美学もなかったという点においては、二つの時期に本質的な差異を見ることは出来ない。この百数年間をとおして、頽廃の戯画は可能であっても、デカダンスそのものの条件は存在しなかった。かえって、民衆の生活の基底にはそれがあり、文化人は何等かの度合いにおいて啓蒙主義者であることによって、まがいしか持ち得なかったのではないか。

明治以後の日本の文化を特徴づけている観念性は、縮刷版が巻末に至った現在において、のっぴきならぬ検証台に立たされているのだ。

観念性とは、観念の相違が分裂に直結するということである。総ての分裂が、観念によって正統化されるということでもある。分裂は久しく時代の法則であった。

それだけにかえって、動乱は遠い村の火事のように鮮やかで、崩れた空中楼閣に横たわる死体は決して死臭を放つことがなかったのだ。それは精神的所産の不毛を意味してはいたが、不毛は頽廃そのものではなかった。

ただ、第二次大戦後、あらゆる観念を用ありとする民主主義社会が成立し瀰漫したことによって、逆に総ての人々を用なしに追い込むという倒錯した事態が出現した。

方丈の庵を結ぶべき土地を私達は見附けることができない。佗びの世界は許されず、風流まがいすら不可能になった。中世からの距離が今ほど遠くなったことはなかったのである。

「艶という、元来はつやつやとしてなまめかしいものが、反って冷えて寒く、寂びて清いものに持続してくることが中世の中世たる所以である」

と唐木順三氏は書いておられるが、今はなまめかしいものが暖かく湿って手垢にまみれることで腐臭を放つのである。死のみがそれを掻き消すことができる。死体が匂わず、生体が死臭を放つというのは、陰画の世界にも似た息苦しさである。

戦争も革命も、大国のあいだではどうやら疑似イベントの相を見せはじめており、密林や砂漠の合戦の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com